

大蛇山祭り

大蛇山祭りは、毎年7月の第4土曜日に大牟田市で開催される、目を引く祇園祭である。

祇園祭は疫病の蔓延を防ぐ払うために京都で始まったものである。大蛇山祭りでは、火や煙を噴き出す巨大な蛇の山車が音楽に合わせて町を練り歩く。地元住民は、1年間の無病息災を祈願して、小さな子供たちを大蛇の口の中に入れる。子供が泣けば泣くほど、より強力な守護が得られるとされている。

祭りの起源ははっきりしないが、17世紀初頭に柳川藩主がこの地域を霊的に守るために、同地で最初の祇園神社（現在の三池本町祇園宮）を創建した。大牟田周辺には安定した水源がなく、農民たちは蛇のような水の神様である大蛇に雨乞いをした。1637年、近隣の三池藩で自然災害により作物が全滅したため、藩主立花家は堰を建設し、貯水池を作り、安定した水の供給を実現した。地元の言い伝えによると、その3年後に柳川藩が神社に山車を寄贈したといわれている。

大蛇山祭りの前身である三池祇園祭りの最も古い記録は1852年のものである。それによると、竹と縄でできた神輿を約30人が引いていたとある。これが現在の蛇のような形をした神輿の原型と考えられ、この時に水神信仰が祇園祭と融合したと考えられている。1853年には立

花家から大蛇山が寄進された。1893 年には、本町祇園神社の若者たちが、以前の山車を模した山車を曳き始めた。

明治時代（1868～1912 年）に大牟田で石炭採掘が盛んになると、多くの人々が炭鉱で働くようになった。新たにできた 4 つの炭鉱地区でもそれぞれ山車を制作し大蛇山パレードを開催した。

第二次世界大戦後、さらに 12 の地区が山車を制作し独自の大蛇山パレードを開始した。

これらの山車のほとんどは現在も使用されており、高さは 5 メートル以上、重さは 3 トンを超える。1950 年代には、近くの筑豊にある三井グループ経営の炭鉱で書かれた炭鉱労働歌「炭坑節」に合わせた踊りが始まった。この歌は、同じく三井が運営する三池炭鉱の労働者家族たちにも受け入れられた 1960 年代までに、すべてのパレードが総踊りと合わさった。現在では 1 万人以上が参加し、パレードは 2 キロメートルに及ぶこともある。